

Title	営利衝動論 ( 其二 )
Sub Title	
Author	気賀, 勘重
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.4 (1910. 10) ,p.421(53)- 438(70)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101000-0053">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19101000-0053</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

52

なる主權授受の式を擧げて、米布合併の事始めて成る。

合併の將に成らんとするに先ち、日本より抗議を提出したる事あり。又その合併成立したる後、或は伯林駐在の布哇公使の資格に就き、或は布哇と米國本土間の沿岸貿易に就き、其他種々の點に就て、興味ある外交問題を生じたれども、本記事の目的は單に米布合併の成行事實の大體を記述するに止まるなるが故に、是等の事には自ら及ぶこと能はず。唯だ日韓合併が、米布合併と重要な諸點に於て類似し、就中日本が最初韓國の獨立を援助したる事實は、米國が最初布哇の獨立を承認し、且つ絶へず他國の侵略を阻止したる事實と似たる上に、兩者ともに遂に之を合併するに至りたる成行は、東西恰も符節を合するが如くなる其史上の事實を、覺束ながら證明することを得ば足れりとするのみ。

(完結)

## 營利衝動論(其二)

## 氣賀勘重

三

可及的多額の財貨を享得し蓄積せんとする所謂營利衝動は人類天稟の固有性にして原始時代以來常に一切の人類に附隨せるものなりや否や。將た又此種の衝動は經濟的欲望満足の目的よりして外界の物質界を制馭せんとする所謂經濟的行爲一切の根本的原始的基因と看做し得べきや否や。此兩問題は一見肯定し得可きが如く、舊派學說の如きは即ち之を肯定せるものなりと雖も、少しく歴史的發達の跡を尋ぬるに於ては吾人は之を否定せざるを得ざるなり。蓋し根本的肉體的の感情に基因する食欲、性欲其他の原始的衝動と粧飾品、武器器具、成功等を渴望する幼稚なる活動衝動及び認承衝動の夙に太古人類の心裡に發動して、經濟的行爲の最初の原因と爲り將た最も永續的原因と爲れるは復た疑ふを要せざるの事實と云ふ可く、又此種衝動の行爲に現はるゝに際して或種の物品を特に自家

54

占有の下に保留せんとする性僻の混入作用する事實も幼稚未開の人類間に屢々之を目撃する所なりと雖も、併し、本來の所謂營利衝動なるものに至りては思想幼稚なる小兒及び少年間にも將た又財産所有の制度及び商業の全然闕如せる草昧未開の民族間にも全く之を認むるを得ず。其發動は智識及び感情の相當に發達せる人士并に文明の進歩一定の程度以上に達せる民族を待ちて初めて之を見る可きなり。教授シユモラー氏嘗て這般の消息を序して曰く、

經濟的盡力は本來主として飢餓に依りて喚起さるゝものなり。原始社會に於ては飽食暖衣に次で懶惰安逸を貪り、飢餓に促されざる以上、復た貨財收得に努むるとなし。些細の器具及び武器を所有することあるも、之を尊重するは自衛自存の手段として之を尊重するに外ならず。貯蓄其物、所有權其物に至りては更に之を喜ぶの情なし。殊に多額の貯蓄に至りては之を有するも殆ど利用の途なきが故に更に之を望むことなし。粧飾的武器及び器具の類は之を有するを喜ぶも、之を喜ぶは依て以て同輩の尊敬を博し得可く、狩獵其他の活動に成功を博し得可き希望あるが故のみ、敢て他の動機あるに非ざるなり。然るに、欲望及び所有物漸く

55

増加し、活動的衝動漸く發達し、技巧熟練亦漸く加はると共に、苦心、勞力の慣習此に其端を啓き、認承及び競争の衝動亦其間に混入し來りて、各人は戰鬪及び狩獵の行爲上他の輕侮する所と爲らざらんと努むるに至る。此時代に於て婦人、老人及び奴隸の徒の他人の爲に經濟的行爲を取るあるも、それは家族に對する同情心又は虐待に對する恐怖心に出づるものにして、營利衝動に出でたるに非ず。他人の利益よりも自家の利益を謀らんとする未開人の自然的衝動は社會的制度の之を抑壓するものなき限り、斯る未開時代に既に實現するも、其實現するや貨財貯蓄を目的とする盡力として現れずして寧ろ良好なる飲食物、美なる粧飾物、又は榮譽の地位を得んとする盡力として現はるゝの常なり。然れど家畜、妻妾及び奴隸に對する所有權發生すると共に、所有物貯蓄を目的とする人類利己心の發動此に初て發生し、爾來商業及び金銀財寶の増加に伴ひ將た貸借取引の發達に伴ふて其衝動は益々激烈を加ふるに至る。是に於てか優者は其所有家畜及び財寶の多きを競ひ、金銀財寶を收得せんとする幾多の競争的争鬪を生じ、財寶を得る以上は之が手段たる殺人も暴力も偽計も將た又流血も等しく一般の推稱讚美する所と爲るなり。

56 斯くて所有財寶の増加より生ぜる暴力的争闘は爾來幾多の星霜を經過し幾多の變遷を経て終に一定の嚴格なる法律制度、宗教的法則并に倫理的な法則の律する所と爲り、此法則の認むる範圍内に於ける貨財獲得の盡力を認容する平和的競争の時代に達するに至る。文明國民間に於ける營利衝動は正に斯の如くして此に初て發生するなり。即ち此衝動の發生及び發達は自我感情、自我意識の發生及び發達と相平行し、近世的個人性の發展と相并んで實現するものなり。而して此實現と共に從來他の目的、他の方面に向て發動せる自維自存の盡力は多數の人士に在りては營利、利潤、資産獲得の上に集中するに至り、他に卓出せんとするの感情、家族及び將來の爲に活動せんとするの情、名譽、權力、享樂を得んとするの情等各種の感情は何れも資産獲得の慾を進むるの實を生ずるなり云々と。

然り而して、斯くて發生せる營利衝動の發達は又未開蒙昧の人類を驅り、懶惰放縱なる其日暮しの蠻境を脱して規律ある文明的經濟生活に入らしむる重要な一手段たるの實あり。蓋し眼前の享樂と安逸とを捨て、經濟的資料を蒐集せんとするの盡力は無規律無秩序なる經濟生活を兩分して勞働と享樂との二方面を區

別し勞働勤勉の美風を生せしむるものなればなり。人類を教育して勞働の慣習を養成するの手段は鞭撻訓練の方法に之を求め得可しと雖も、斯る手段の効果は到底一時的なるを免れず。人をして内心之を服膺せしむるの永續的効果を有する手段は利益を得せしむるとの外ある可らず。法律及び慣習の認容せる方法に依りて利益を得んとするの精神一度人心を支配するに至らんか、此に初て眼前の快樂を捨て、將來の幸福を謀り、勞働の不愉快を忍んで之に従事するの風は發達するなり。而して將來の利潤、將來の快樂の爲めに現在の快樂を犠牲にせんとする此感情、此衝動は又實に人類の倫理的な生活の發端たるなり。依是觀之、營利衝動は實に勞働及び勤勉の訓育者たり、人類の生活、思想并に自制心を向上せしむるの原因たり、將に個人をして獨立、不羈、自由且つ高尚なる生活を爲すを得せしむるの基礎たりと云ふ可く、而して營利衝動の發達斯の如くなるに及んで、文明人の此衝動は未開野蠻の人民に全然闕如せる一種の營利衝動と爲るに至る。名譽及び正義の觀念、慈悲、忍辱の感情、其他幾多の高尚なる徳風に於て歐洲人をも後に瞠著たらしむる東洋一部の民族が財寶を卑視するの氣風を有し、歐洲人の一般に資産尊

58 重の氣風あるを見て貪慾吝嗇の人種と爲すが如きは、畢竟此發達せる營利衝動を  
缺き、歐洲人の心意を了解せざるの致す所ならざるを得ず。一印度人が歐人に向  
ひ人生斯の如く甚だ短きものなるに、卿等は如何なれば斯く巨大堅固なる家屋を  
建築するやと質問せりと云ふ一話は、以て這般の消息を明するに足る可きなり。然  
りと雖も、等しく文明國民の間に在りても、營利衝動の最も完全に發達せるは自家  
經濟漸く頼れて、交易的經濟充分に發達し、社會各員の所得概ね複雑なる交易的組  
織を経て享得せられ、強者智者勤勉家それら、其能力に應じて大に此所得分配を  
左右するの實ある時代に在り。斯る時代は通例舊社會の制度頽廢して、新社會制  
度之に代はり、地方的領域的經濟の組織解廢して、廣大なる國民經濟の組織と爲り  
經濟上に於ける各種の舊制限概ね撤去せられて、自由交易の制度の下に、勞働者、企  
業家、販賣者、購賣者、相對立するの時に在り。經濟上各自の營利衝動の外、復た相  
互の關係を制限するものなく、極端なる營利衝動に伴ふの弊害此に現はれて、各人  
は他人の損害を顧るとなく、獨り自己の經濟的利益のみを謀るとを得ずとの倫理  
的原則を生じ、法律亦之を認むるに至るは、正に此時代にして、經濟場裡の競争者間

に旺盛なる營利衝動の發現を生じ、當今大都會及び取引所場裡に於て商人、企業家  
及び投機者の間に、正當有効且つ必要と認めらるゝが如き營利衝動の發生を見る  
も亦此時代に在り。營利衝動なるものが人性固有の原始的衝動に非ず、又其性質  
作用常に一定せるものに非ずして、時代の進歩に従ひ性質、方針、并に強弱の度を變  
ずるものなると以て知る可きなり。

營利衝動が斯の如く歴史的發達の法則に支配せらるゝものなるの結果、其發達  
の狀態は亦國に依り將た地方に依りて相異なるの實あり。原始的未開國民間に  
此衝動の全然闕如せるは勿論、歐洲文明國民間に於ても、南部及び東部國民の此衝  
動は北西部國民よりも遙に弱く、就中其最も發達せるは英國及び北部佛國なるの  
狀あり。又獨逸國內に在りては、此衝動は南部地方よりも多く、北部地方に發達し  
我日本に於ても、京阪地方の人士は東北地方に比して、此衝動に支配せらるゝこと  
遙に大なるの狀あり。其他、伶俐果敢なる高等人種の住せる北米其他の殖民地に  
於ては、此衝動は特に著しき發達を遂げて、爾餘の衝動を壓するに至るの場合もな  
きに非ず。新大陸の國民が概して營利以外の更に一層高尚なる人生の目的に於て

60 遙に舊文明國に劣るの状あるは其原因一は此に存するなり。

營利衝動の發達は斯く地方に依り相違せると共に、同一社會に於ても亦階級に依り職業に依り將た人に依りて相違せるものあり。商業家、銀行業者、大企業家が思慮深き農業者よりも一般に強大なる此衝動を有し、官吏、軍人、宗教家、教育家等の間に此衝動頗る薄弱なると共に、手工業者及び小農の徒輩の間に於ける其發達の亦甚だ緩漫幼稚なるを免れざるは識者の等しく認知する所の如く、而して更に勞働者其他の下級人民に在りては此衝動殆ど闕如し、眼前の享樂に眩惑して將來を忘るゝこと恰も小兒に等しきものあり。所謂宵越しの金を保留せざる其日暮しの氣質は帝に往年の江戸職人に止まらず、當今の農業界及び工業界の下級人民間にも其類例決して少なからざるなり。下級人民の斯る性僻を以て世間の論者は往々之が原因を近世經濟界の繁激且つ器械的なる勞働に歸する者ありと雖も、斯る性僻が實際上、都市勞働者よりも寧ろ下級農民間に多く、又輓近勞働運動の發達と共に工業勞働者間に營利衝動の漸く發達し來るあるを觀れば、下級人民の營利心缺乏の原因が主として此衝動の發達未熟なるに在るを知る可きなり。

依之觀之、營利衝動は其發達上第一には一定の技術的社會的條件に支配せられ、第二には一定の倫理的觀念習慣及び法律に支配せられ、又第三には各人を驅りて多少の利己的感情を起さしむる幾多の原始的衝動及び感情に支配せらるゝものなるを見る可し。然れど此原始的感情即ち享樂權力及び尊敬を望むの情は通例人に依りて其程度を異にし、又常に多少潜在して充分に表面に表はれざるの風あり。勿論享樂の程度進歩し、奢侈及び名譽の欲望發達せるの時代及び場所、即ち例令ば近世の大都會の如きに在りては、營利衝動も亦著しく増進するの實ありと雖も、併し主として營利衝動に支配せらるゝ多數人士に在りては、此等の感情は其行動主要の動機たること甚だ少なく、本來此等の感情を満足せしむるの手段たるに過ぎざりし富其物が寧ろ目的其物と爲るの状あり。此等の人士に取りては主たる目的は營業の好成績に非ず、富に伴ふの權力又は享樂に非ずして、實に富其物に外ならざるに至るなり。營利衝動の眞面目正に此點に存せり。

然るに、國民經濟の發達正に其頂點に達し、舊道德舊習慣の無數の制限殆ど悉く撤去せられて交通及び商業充分に發達し、經濟的行動全く自由と爲れると當今の

如き時代に及んでは斯の如く發達せる營利衝動は往々其正當の範圍を超越して熱狂的の營利欲と爲り自家の勤勞と盡力に依りて利を得るに満足せずして、僞計壓迫、詐欺、姦策、破廉、耻行爲等所有る手段に訴へ、只管自家の營利を是れ計るの風を生ずることなきに非ず。黄金萬能の思潮一世を風靡し、財貨收得の爲には手段を選まず、富者は貪懋飽くなきの欲を恣にして、傲然下層社會に蒞み、過激なる勞働者は之に激して企業家をば利潤盜賊と呼ぶに至るは實に斯る時代に在り。然かも一派の物質主義論者は斯る極端なる營利衝動の作用にも拘らず、今日尙ほ所有る營利衝動を目して進歩發達の原動力と爲し、只管其功德を謳歌するの狀あり。強烈なる營利衝動の作用するあるに非ずんば、當今の文明國に見るが如き經濟的發達は到底之を望むを得ざる次第は吾人も亦實に之を認めざるを得ずと雖も、吾人は之と同時に又他の一方に於て、此衝動の極端に驅するの弊害をも之を認めざるを得ず。營利衝動の作用極端に驅せて冷酷なる貪欲の風を生せんか、社會關係は紊亂せられ、社會の平和は攪亂せられ、憎惡怨嗟の聲天下に滿ちて、道德は地を拂はざるを得ざる可し。然れば適當なる社會制度に依り正當なる範圍内に營利衝動

を制馭保存して一方には其良効果を擧げしめ、又他の一方には道德界倫理界の發達を害するが如き貪欲と不正とを制肘剷除するの策を講せざる可らず。而して是れ實に斯學上將た實際上當今の重要問題たるなり。社會主義者の如きは此點に關し利潤收得の途を杜絶して營利衝動を根絶し、依て以て平和なる黄金時代を現出せしめんとするの風あるも、深く歴史の根底を有し、又勤勉、節約、其他幾多の經濟的徳性の一原因たる此衝動を根絶するは蓋し不可能事たるを免れざる可く、而して又發達せる當今の此衝動の効果が往古の「アゼン」及び羅馬等に於ける其効果よりも遙に善良なるものあるより觀れば、其根絶は必ずしも必要事に非ず、寧ろ其進化發達を助成して一層善良の効果を擧げしむるこそ須らく取る可きの策なる可し。惟ふに將來に於ける發達の方針は其絶滅に非ずして必ずや適宜の制馭に在る可きなり。

## 四

それは兎に角以上の所言に依りて之を觀れば營利衝動は彼の自存衝動の如く原始的根本的なる衝動に非ず。爾餘の根本的衝動と相并んで判然區別さる可き一

64 種特別の衝動に非ずして、自存衝動及び活動衝動の發達と個人的利己心の發達とが一定の經濟的發達の階段に達せる社會に於て之を生せしむる派生的の衝動なり。物質的欲望の進歩と將來に對する配慮の精神、自制心、勤勉心等の發達を待ちて初て發達するの衝動なり。斯る發達なき太古幾千年間經濟的行爲は實に此衝動なくして然かも其實を存したるなり。加ふるに此衝動の發達せる當今の社會に於ても此衝動の作用は之と連帶作用せる爾餘の感情及び衝動の異なるに従ひ人に依り將た階級に依りて其特色を異にするの實あり。即ち此衝動は人に依りては或は強烈なる肉體的欲情に附帶して作用し、或は家族に對する獻身的愛情と連帶し、將た或は名譽心、權力的欲望等と相結んで其作用を逞ふするを見る。故に同一の營利衝動にてありながら一方にては浪費者の用を爲すことあると共に、他の一方には勤勉家活動家の用を爲すことあり。其作用の結果は決して常に一樣ならざるなり。

營利衝動は斯の如く原始的の衝動に非ざると同時に、又人類一般に平等に之を有する自然の原動力にも非ず。其發生及び作用は道德及び習慣に依り法律に依り將た社會の制度に依りて常に拘束され將た制馭さるゝものなり。併し、一定の時代、一定の國民又は一定の階級に就て之を觀れば、各人の間に於ける此衝動は大體同一なりと云ふを得ざるに非ず。從て一定の市場、一定の取引に就て之を觀れば、其市場、其取引に關係せる一定種類の人士は通例等しく此衝動に支配せられ、何れも可及的最少の犠牲に依りて可及的多大の利益を得んと盡力するものなりと云ふを得可し。斯學上當今の文明國民間に於ける價格及び利子の形成、所得の分配、其他之に類する國民經濟上の現象を説明するに當り、其原因を一定の一般的營利衝動に求めて、然かも大體上當を失せざるを得るは畢竟斯る事實あるが故なり。然りと雖も此事實より推斷して各人一様に同一の營利衝動に支配せらるゝものなりと爲さば大なる誤謬と云はざる可らず。同一社會に於ても暴戾無恥なる高利貸、殘酷なる家内工業仲受人等の營利衝動が良心あり同情心ある着實なる企業家の營利衝動と大に異なるものあるは少しく思慮ある者の容易に認知し得可き所たり。況んや時代を異にし場所を異にせる各人の間に於てをや。營利衝動の作用は各人間決して同一なりと云ふを得ざるなり。從て當今交易、賣買其他之に



66

類するの行爲は主として營利衝動に支配せらるると云ふを得可しと雖も、一切の經濟的行爲一切の經濟的現象を説明するに一に此衝動の作用を以てせんとするは、一大謬見たるを免れず。現に家内經濟、家族經濟の現象は勿論、企業の形式并に國家財政の如きも此衝動のみを以てしては到底之を説明するを得ざるなり。

さはれ、國民經濟の發達上に於ける營利衝動の効用は頗る偉大なるものあり。理解力及び自制力の發達と相俟ち、無規律なる活動衝動を驅りて勤勉勞働の美質と爲らしむるものは此衝動なり。將來に對する念慮、家族的愛情等の發達と相俟ちて經濟的思想の發達を促し、節約貯蓄の風を喚起するものは此衝動なり。智慮あり氣力ある多數人士を驅りて經濟的方面に其精力を傾注せしめ、企業的精神を鼓吹して生産の發達を促進せるものは此衝動なり。交易經濟をして當今の如き發達を致さしめ個人の經濟的活動力を刺激して國民經濟今日の發展を遂げしめたるものも亦其主要の一原因は正に此衝動に在り。縱令ひ爾餘幾多の智識感情及び衝動と相結びたるの實あり、又相結ぶを必要とせるものありとは云へ、兎に角近世に於ける經濟的發達の原動力として此衝動の効用は實に没却す可らざるも

のあり。此衝動の發達に伴ふて資産收得に熱中するの人士益々多きを加へ、氣力旺盛意志鞏固にして企業心に富める人士の經濟的活動上主要の地位を占め、其富亦益々他に超ゆるに至るの傾向を生せるは争ふ可らざるの事實、而して是れ正に近世經濟の發達の一大原因たるなり。

唯斯くて富を致せるの人士中或は虛榮心、或は動物的欲情、或は其他の劣情に動さるゝの外、同情心なく、高尚なる人生の他の目的なく、獨り營利衝動のみの支配する所と爲れる人士亦甚だ少なからず。而して人間として推稱す可き性格なく、高尚なる性質全然闕如せる人士の斯く跳梁せるを見ては、人類が獨り營利衝動のみに支配せらるゝに至るの頗る望ましからざるは復た論を待たず。若し營利衝動にして常に斯る傾向をのみ助長するものとせば、吾人は此衝動の發達を見んよりも寧ろ此衝動の薄弱なる從て企業能力の劣等なる企業家の經濟界を支配するの却て一般幸福の爲に望ましき現象たるを感せずんば非ざるなり。加ふるに他の高尚なる徳性の之に伴ふなき赤裸々の營利衝動は道德上將た社會上有害なるのみならず、經濟上に於ても亦有害の結果なきを得ざるものあり。蓋し高等なる經

67

濟的生活は社會的團體の裡に於て初て其實を完ふし得可きものなるに然るに斯る團體的結合は同情的感情なく倫理的制度なきに於ては到底存立するを得ざる可ければなり。例令ば家族經濟と云ひ、企業と云ひ、經濟的團體と云ひ、將に市場の交易取引と云ひ、何れも各人間に一定の結合の感情なく相互の信用なきに於ては、到底其實を擧ぐるを得ざる可きが如し。要するに進歩せる經濟的生活は正直、公正其他幾多の道德的性質の必ず發達するを必要とし、其發達なきに於ては文明的の經濟生活は到底不可能たるを免れず。此等の道德的性質即ち所謂經濟的徳性なるものは營利衝動と等しく進歩せる國民經濟の發展の爲に必要不可欠の要素たるなり。

依是觀之、營利衝動は利害兩様の結果を生ずるの傾あり。而して其有利なる傾向を助長して有害なる傾向を抑制するは經濟的進歩を致さしむる所以なり。シユモラー氏が營利衝動は若し一方に於て個人の爲に其發展、其健康、其實力及び勤務能力を増進せしむるの作用を爲すと共に、然かも他の一方に於て社會全體の幸福上必要なる範圍以外に奔逸することなく、人類の意志の一部分として高尚なる

他の目的と適當に配合按排せらるゝに於ては、人類行爲の要素として正當の地位を有するものなりと云へる所以實に此に在り。而して文明國民間に於ける營利衝動發達の跡を看れば、其發達の方針は大體上亦此に在りしの状態を見る。然れば當今の經濟的現象は決して營利衝動の一原因のみよりして一切之を説明し得可きものに非ず。若し斯る説明を爲し得可しとせば、吾人は亦此衝動と並び作用する各種の經濟的徳性よりするも等しく之が説明を試むるを得べし。然かも其説明は何れも全般の眞理を闡明するものたるを得ざるや明けし。教授、ワグナー氏を初め、最近の經濟學者が概ね所謂經濟人の行爲を論ずるの主義を捨て、經濟行爲の要素として習慣、法律及び道德の三者を斯學上の説明に加ふるに至れるは畢竟此理由に出でたるに外ならざるなり。

然り而して、斯く論じ來れば此衝動に對する教育上將た政策上の方針も亦多言を要せずして明なる可し。徒に其弊を見て之を根絶せんとするは所謂角を矯めんとして牛を殺すの愚策たるを免れざるのみならず、深く幾多の原始的衝動と多年の歴史的發展とに其根源を有せる此衝動の根絶は惟ふに勞して功なきの事業

70 たらざるを得ず。然りとて其發達を獨り其起く所に放任せんか、有害なる方面に奔逸するの危険は之を免れざる可し。是に於てか處す可きの途は唯一あるのみ。他なし。其發達は之を助長すると共に其發達を善導して有利の方針に馳せしむると換言すれば其發達と共に其惡果を制限す可き爾餘の高尙なる美德の發達をも助長し、兩々相待ちて真正なる經濟的發達の効果を擧げしむ可きこと即ち是なり。(完結)

講演

家屋構造と經濟狀態

下村 宏

私の題は東西家屋の構造の違ふのは、經濟狀態、社會狀態にどう云ふ影響を及ぼすかと云ふのであります。其意見を私が此所に申上げるのではなくて諸君に研究の材料を與へて諸君に研究を願ひたいのであります。

71 私は諸君に御研究を願ひたいのは歐羅巴各國の家屋の大きさと、それから歐羅巴各國の人間の身體の大きさと、それから家屋との比例であります。是がどう云ふやうになつて居るか云ふことを諸君に御研究を願ひたい。私は未だ調査が出来て居らない、それから假に歐羅巴各國の家屋の大きさと西洋各國民の身體の大きさの比例が若し分つた

講

四三九

ならば、日本の今日の家屋と日本の吾々の體格との大きさの比例が又どうなつて居るか、私の外國を多少廻つた實驗に依ると、歐羅巴でも露西亞の家屋であるとか、或は獨逸の家屋、或は佛蘭西、英吉利、是等の土地に於ては家屋は大きかつたと記憶する、同時に和蘭であるとか或は白耳義の諸國では家屋が比較的小さかつたし道幅も狭かつたやうに記憶する、無論家屋と云ふものは時代に伴うて變遷のあるものでありますから、白耳義のガム、ロツターダムと云ふやうな古い土地は、今日新に勃興しつゝある例へば北米合衆國の如き建國に比して無論非常に小さいと云ふことは當然の事と思ふ、なれども大體に於て西洋人の大きさと西洋の家屋と云ふものと、日本人の大きさと日本の家屋と云ふものを方程式を拵えたならばどう云ふ工合に違つて居るか、それで私は數字でどの位の歩合と云ふことは申上げ兼ねるが、私の家屋の大きさと云ふ意味は主として間取の大きさと云ふて